ルカの福音書　31 回
弟子の性質
ルカ 6：39～49

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエスは、弟子たちに対して「平地での説教」を語られた（6：20）。
         ＊群衆もそこにいて、聴いていた。
      ②山上の垂訓（マタ 5～7 章）の中心テーマは、「真の義とは何か」である。
      ③平地での説教の中心テーマは、「隣人愛」である。
      ④前回は、弟子の行為について取り上げた。
         ＊7 つの愛の行為
      ⑤今回は、弟子の性質について取り上げる。
         ＊愛の行為の根底にある性質
         ＊5 つのたとえ話

2. アウトライン
   (1) 盲人による手引き（39～42 節）
   (2) 2 種類の木（43～44 節）
   (3) 2 種類の人（45 節）
   (4) 2 種類の告白（46 節）
   (5) 2 種類の建築家（47～49 節）

3. 結論：私たちへの教訓

弟子の性質について学ぶ。

Ⅰ．盲人による手引き（39～42 節）

1. 39 節

Luk 6:39　イエスはまた、彼らに一つのたとえを話された。「盲人が盲人を案内できるでしょうか。二人とも穴に落ち込まないでしょうか。

(1) このたとえ話では、案内する人と案内される人がいる。
   ①案内する人とは、イエスの弟子の象徴である。
   ②案内される人とは、イエスの弟子が信仰の道へと導こうとしている人の象徴。

(2) 案内する人が盲人であるなら、悲劇が起こる。

①2 人とも、穴に落ち込む（大事故が起こる）。

(3) マタイの福音書 15 章では、パリサイ人たちが盲人である（マタ 15：14）。

Mat 15:14　彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を案内する盲人です。もし盲人が盲人を案内すれば、二人とも穴に落ちます。」

①平地での説教では、イエスの弟子たちが盲人にたとえられている。

②「愛に関する教え」(27～38 節）に従っていないなら、その弟子は盲人である。

2. 40 節

Luk 6:40　弟子は師以上の者ではありません。しかし、だれでも十分に訓練を受ければ、自分の師のようにはなります。

(1) これは挿入句である（一時的に別の話題に移る）。

①例外もあるが、一般論として、弟子は師以上の者にはなれない。

②なぜなら、本が今ほどなかったので、情報源は師に限定されていた。

③しかし、師がしっかり教え、弟子がしっかり学べば、師のようにはなれた。

(2) この聖句では、イエスの弟子たちが「師」、導かれる人たちが「弟子」である。

①イエスの弟子たちは、イエスの教えを忠実に教える必要がある。

②そうするなら、導かれる人たちは、弟子たちのようになれる。

③この聖句は、弟子たちへの励ましである。

④次の 41～42 節で、もとの文脈（盲人、視野狭窄）に戻る。

3. 41 節

Luk 6:41　あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分自身の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。

(1) 師としての立場には、優位性がある。

①師は、自分の欠点に気づかなくても、弟子の欠点に容易に気づく。

②ここでは、誇張法が使用されている。

＊兄弟の目にあるのは「ちり」である。

＊自分自身の目にあるのは「梁」である。

4. 42 節

Luk 6:42　あなた自身、自分の目にある梁が見えていないのに、兄弟に対して『兄弟、あなたの目のちりを取り除かせてください』と、どうして言えるのですか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、兄弟の目のちりがはっきり見えるようになって、取り

除くことができます。

(1) 自分の欠点を修正しないで、弟子を指導するのは、偽善である。

①イエスの愛の教えを実践しないで、弟子に愛を教えることはできない。

②師の偽善は、弟子の無知よりも重大な罪である。

(2) 自分から愛の実践をするなら、弟子の欠点を取り除くことができるようになる。

①そうしないなら、その人は「盲人を案内する盲人」となる。

Ⅱ．2 種類の木（43～44 節）

1. 43～44 節

Luk 6:43　良い木が悪い実を結ぶことはなく、悪い木が良い実を結ぶこともありません。

Luk 6:44　木はそれぞれ、その実によって分かります。茨からいちじくを採ることはなく、野ばらからぶどうを摘むこともありません。

(1) 悪い性質を宿した人は、良い実を結ぶことができない。

①それゆえ、イエスの弟子は、イエスに仕える前に内面を掃除する必要がある。

②良い木は、良い実を結ぶ。

③良い師は、良い弟子を生み出す。

(2) 山上の垂訓では、イエスはこのたとえ話を偽預言者に適用した（マタ 7:15～16）。

Mat 7:15　偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。

Mat 7:16　あなたがたは彼らを実によって見分けることになります。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるでしょうか。

(3) 平地での説教では、イエスはこのたとえ話を自分の弟子たちに適用している。

①クリスチャンでも悪い実を結ぶことがあるのは、罪の問題があるからである。

②イエスの弟子たちも、良い実を結ぶ場合と、悪い実を結ぶ場合がある。

③それゆえ、イエスの弟子たちは良い実を結ぶように励む必要がある。

Ⅲ．2 種類の人（45 節）

1. 45 節

Luk 6:45　良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。人の口は、心に満ちていることを話すからです。

(1) このたとえ話は、2 種類の木のたとえ話と同じ真理を教えている。

①倉とは、イエスの弟子たちの心である。

②イエスに従順に従っている弟子は、心の良い倉に、良い物を蓄えている。
③悪い弟子は、心の悪い倉に、悪い物を蓄えている。
④心の倉から何を出すかによって、その人の内面が判断される。

(2) 口から出てくることばについても、同じことが言える。
①心の管理ができていない弟子は、ことばの管理もできない。

Ⅳ．2 種類の告白（46 節）

1．46 節

Luk 6:46　なぜあなたがたは、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。

(1) 表面的告白と真実な告白の対比
①山上の垂訓では、この内容は偽教師たちに適用されている。
②ルカは、弟子たちへの警告としてこれを書いている。

(2) イエスを「主よ、主よ」と呼ぶだけでは、本当の弟子とは言えない。
①「主よ」は、敬意を表する呼びかけである。
②「主よ、主よ」は、その強調形である。
＊神性、メシア性、権威などを意味している。
＊しかし、イエスが復活する前は、必ずしもそういう意味ではない。

(3) 最高の告白をしても、イエスの愛の教えを実践しないなら、真の弟子ではない。

Ⅴ．2 種類の建築家（47～49 節）

1．47～48 節

Luk 6:47　わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人がみな、どんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。
Luk 6:48　その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せても、しっかり建てられていたので、びくともしませんでした。

(1) このたとえ話は、平地での説教の結論である。
①イエスの教えを実行することの重要性を、弟子たちに教えている。
②マタイは、群衆の反応を記している（マタ 7：28～29）。

Mat 7:28　イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。
Mat 7:29　イエスが、彼らの律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたか

らである。

③ルカは、それを省略している（弟子たちへの教えである）。

(2) イエスの教えを聞いて実行する人は、賢い建築家である。

①地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人である。

②ルカは、ギリシア・ローマ風の、地下室のある家を想定していると思われる。

③その家は、洪水が押し寄せても、びくともしない。

④洪水とは、敵の誘惑、人生における試練、神が与えるテストなどである。

2. 49 節

Luk 6:49　しかし、聞いても行わない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家はすぐに倒れてしまい、その壊れ方はひどいものでした。」

(1) イエスの教えを聞いても、それを実行しない人は、愚かな建築家である。

①土台なしで地面に家を建てた人である。

②マタイは、立てる場所を対比させている（岩の上か、砂の上か）。

③ルカは、土台の据え方を対比させている（深く掘り下げるか、土台なしか）。

結論：私たちへの教訓

1. 人生における長期計画の重要性

(1) 目先のことだけしか考えない人は、土台なしに家を建てる人である。

(2) 長期計画を立てる人は、深く掘り下げて土台を据える人である。

(3) 大水が出たときに、両者の違いは明らかになる。

2. イエスは、献身した弟子と、そうでない弟子を対比された。

(1) 一連のたとえ話は、信者と未信者の対比ではない。

(2) いつ救われたかに関しては、福音記者たちは、さほど興味を示していない。

(3) それよりも、イエスの弟子となる決心をしたかどうかに興味がある。

(4) いつ救いに至る決心をしたかが重要になるのは、書簡に入ってからである。

(5) その場合でも、今の私たちほどは、「いつ」ということは気にしていない。

3. 新生体験に続く弟子化のプロセスが、極めて重要である。

(1) 新生体験は重要である。

(2) と同時に、弟子となる決心をすることも重要である。

(3) この時代を生き抜くためには、本物の弟子を育てる必要がある。

(4) 公生涯の後半においては、12 弟子の訓練が中心テーマとなる。

ルカの福音書　32 回
百人隊長のしもべの癒し
ルカ 7：1～10

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエスは、弟子たちに対して「平地での説教」を語られた。
      ②語り終えると、カペナウムに入られた。
      ③ここから、ルカの福音書 7 章が始まる。
      ④ルカは、イエスをあわれみ深い方として描いている。
         ＊群衆は、あわれみに満ちた行いを、神の介入によるものと見なした。
         ＊パリサイ人たちは、イエスに関して懐疑的であった。
      ⑤あわれみの行為の一例として、百人隊長のしもべの癒しが取り上げられる。
         ＊並行箇所は、マタ 8：5～13 である。

2. アウトライン
   (1) 舞台設定（1 節）
   (2) ユダヤ人の長老たちの懇願（2～5 節）
   (3) 百人隊長の願い（6～8 節）
   (4) イエスの驚き（9～10 節）

3. 結論
   (1) 弱者への配慮
   (2) ユダヤ人と異邦人の関係
   (3) マタイとルカの視点の違い

百人隊長のしもべの癒しについて学ぶ。

Ⅰ．舞台設定（1 節）

1. 1 節

Luk 7:1　イエスは、耳を傾けている人々にこれらのことばをすべて話し終えると、カペナウムに入られた。

(1) この節は、物語を次に進めるための移行文である。
   ①平地での説教に耳を傾けていたのは、弟子たちだけではなかった。
   ②一般の民衆も、イエスの教えに耳を傾けていた。

(2) イエスは、カペナウムに入られた。

①イエスは、この町を伝道の拠点とされた。

②イエスは、この町で多くの奇跡を行われた。

Ⅱ．ユダヤ人の長老たちの懇願（2～5 節）

1．2～3 節

Luk 7:2　時に、ある百人隊長に重んじられていた一人のしもべが、病気で死にかけていた。

Luk 7:3　百人隊長はイエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けに来てくださいとお願いした。

(1) ある百人隊長が登場する。

①通常は、60 人～80 人の兵士を統治し、指揮する。

②ローマ帝国の軍政においては、百人隊長が主要な骨格を形成していた。

③由緒ある家系の出で、非常に魅力的な人が多かった。

④新約聖書には、9 人の百人隊長が登場する。

⑤全員、好意的に描写されている。

(2) この百人隊長のしもべが死にかけていた。

①「中風のために家で寝込んでいます。ひどく苦しんでいます」（マタ 8：6）

②「病気で死にかけていた」（ルカ 7：2）

③しもべは、イエスのもとに連れて来ることができないほど苦しんでいた。

④この時代、主人がしもべのことを気にかけるのは、例外的なことである。

＊しもべは、ギリシア語で「パイス」。息子とも訳される。

＊病気のしもべは、家族同然の存在だったのだろう。

⑤この百人隊長は、好人物として描かれている。

(3) 彼は、ユダヤ人の長老たちを派遣した。

①仲介者を通して何かを依頼するのは、古代世界の習慣である。

②ユダヤ人の長老たちは、ラビたちである。

③ラビたちが、異邦人の代理人になるのは、極めて珍しいケースである。

④さらに、ラビたちはイエスをメシアとは信じていないのである。

⑤しかも彼らは、イエスに熱心にお願いした。

⑥そこには、ある理由があった。

2．4～5 節

Luk 7:4　イエスのもとに来たその人たちは、熱心にお願いして言った。「この人は、あなたに

そうしていただく資格のある人です。

Luk 7:5　私たちの国民を愛し、私たちのために自ら会堂を建ててくれました。」

(1) ラビたちがイエスのもとに来た理由がある。

①通常、ユダヤ人たちはローマ兵を嫌っていた。

②この百人隊長は、ユダヤ人から認められていた。

③彼は、イスラエル人を愛していた。

④その愛は、会堂建設となって表現された。

⑤この百人隊長は、神を恐れる異邦人である。

⑥彼は、ユダヤ人たちに貸しを作っていた。

(2) マタイの福音書では、百人隊長が直接イエスのもとに来ている。

①ルカは、事実をそのまま書いている。

②マタイは、事実を要約して書いている。

③ヘブル的には、代理人を派遣することは、本人が行くことと同じである。

Ⅲ．百人隊長の願い（6～8 節）

1．6～7 節 a

Luk 7:6　そこで、イエスは彼らと一緒に行かれた。ところが、百人隊長の家からあまり遠くないところまで来たとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスにこう伝えた。「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので。

Luk 7:7a　ですから、私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした。

(1) イエスが百人隊長の家に行くのは、例外的なことである。

①百人隊長は、「神を恐れる異邦人」であった。

②彼には、儀式的汚れが残っていた。

③特に食物規定上の問題があった。

④ラビたちが例外を設けることを願ったので、イエスはそれに応答した。

(2) ここでも、マタイとルカの記述の違いがある。

①マタイでは、百人隊長自身が語ったことになっている。

②ルカでは、百人隊長は友人たちを派遣したことになっている。

＊友人たちは、百人隊長が派遣した 2 つ目のグループである。

(3) 百人隊長の謙遜に注目しよう。

①「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です」（4 節）

＊ユダヤ人の長老たちが、彼を推薦した。

②「あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので」（6 節）

＊彼は、ユダヤ人が異邦人の家に入るのは、問題であると知っていた。

③「ですから、私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした」（7 節）

＊彼は、家の外で会うことさえ問題だと感じた。

2. 7b～8 節

Luk 7:7b　ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。

Luk 7:8　と申しますのは、私も権威の下に置かれている者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」

(1) 百人隊長の信仰に注目しよう。

①彼は、権威の意味を体験的に知っていた。

＊彼の指揮下には、100 人近い兵士たちがいた。

＊兵士は、上官の命令によって動く人たちであった。

＊彼自身もまた、上官の指揮下に置かれていた。

＊上官の命令が下れば、それに従った。

②彼は、イエスのことばには権威があり、病はその権威に服すると信じていた。

＊自分と部下の関係＝イエスと病の関係

＊それで、イエスのことばだけを求めた。

Ⅳ. イエスの驚き（9～10 節）

1. 9 節

Luk 7:9　イエスはこれを聞いて驚き、振り向いて、ついて来ていた群衆に言われた。「あなたがたに言いますが、わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」

(1) 福音書では、イエスは 2 度驚いている。

①マコ 6：6

Mar 6:6　イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を巡って教えられた。

＊ナザレは、イエスの故郷である。イエスにとって最も身近な町。

＊ナザレは、イスラエル全体の象徴である。

＊そのナザレの人々が、不信仰な態度を示した。

②ルカ 7：9

＊イエスは、異邦人の百人隊長の信仰に驚いた。

＊メシア預言を知らない異邦人が、これほどの信仰を示した。

＊ルカは、異邦人の信仰の進展を描いている。

＊この箇所で、マタイよりもルカの情報の方が豊富な理由は、そこにある。

2. 10 節

Luk 7:10　使いに送られた人たちが家に戻ると、そのしもべは良くなっていた。

(1) この癒しは、百人隊長のイエスの対する信仰のゆえに起こったものである。

①イエスは、百人隊長が信じた通り、病に対する権威を示された。

(2) ユダヤ人の間には、奇跡を行う人の記録が流布していた。

①しかし、距離が離れた人を癒したという記録はなかった。

②それゆえ、この奇跡は特別なものとなった。

結論

1. 弱者への配慮

(1) イエスは、弱者（マイノリティ）に対してあわれみを示された。

①貧しい者、取税人、婦人、サマリア人、異邦人など

②社会的弱者も、神の救いの計画に含まれている。

(2) 社会的弱者を抑圧することで、自らの特権を維持していた者たちがいた。

①イエスは、彼らから社会的弱者を守ろうとされた。

(3) 私たちへの適用

①イエスは、弱い私を愛し、守ってくださる。

2. ユダヤ人と異邦人の関係

(1) ユダヤ人信者と異邦人信者の関係は、初代教会において大きなテーマであった。

①書簡の多くの箇所が、その問題を取り上げている。

(2) ルカは、イエスを信じる異邦人は、受け入れられるべきであると教えた。

①この百人隊長の信仰は、イエスによって称賛された。

(3) ルカは、別の百人隊長コルネリウスの救いを取り上げている。

Act 10:34　そこで、ペテロは口を開いてこう言った。「これで私は、はっきり分かりました。神はえこひいきをする方ではなく、

Act 10:35　どこの国の人であっても、神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます。

Act 10:36　神は、イスラエルの子らにみことばを送り、イエス・キリストによって平和の福

音を宣べ伝えられました。このイエス・キリストはすべての人の主です。

(4) 私たちへの適用

①分け隔てなく、すべての人に福音を伝えるべきである。

3. マタイとルカの視点の違い

(1) マタイは、神の計画の中に異邦人も含まれていることを強調している。

Mat 8:10　イエスはこれを聞いて驚き、ついて来た人たちに言われた。「まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。

Mat 8:11　あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。

Mat 8:12　しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」

①多くの人が東からも西からも来て＝異邦人のことである。

(2) ルカは、異邦人がユダヤ人を愛することの重要性を強調している。

Luk 7:3　百人隊長はイエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けに来てくださいとお願いした。

Luk 7:4　イエスのもとに来たその人たちは、熱心にお願いして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。

Luk 7:5　私たちの国民を愛し、私たちのために自ら会堂を建ててくれました。」

①イスラエルを祝福する人は、祝福される。

(3) 私たちへの適用

①異邦人信者の責務は、ユダヤ人を愛し、彼らに妬みを起こさせることである。

②ロマ 11：11

Rom 11:11　それでは尋ねますが、彼らがつまずいたのは倒れるためでしょうか。決してそんなことはありません。かえって、彼らの背きによって、救いが異邦人に及び、イスラエルにねたみを起こさせました。

③この箇所は、終末論にまでつながる箇所である。

ルカの福音書　33 回
やもめの一人息子の蘇生
ルカ 7：11～17

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
   ①イエスは、弟子たちに対して「平地での説教」を語られた。
   ②次に、カペナウム周辺の町や村で、奇跡を行われる（7 章と 8 章）。
   ③ルカは、イエスをあわれみ深い方として描いている。
   ＊百人隊長のしもべが癒される。
   ＊やもめの一人息子が生き返る。

   (2) 福音書には、イエスが死者を生き返らせた奇跡が 3 つ登場する。
   ①やもめの一人息子（ルカ 7 章）
   ②会堂司ヤイロの娘（マタ 9 章、マコ 5 章、ルカ 8 章）
   ③ラザロ（ヨハ 11 章）
   ④死者の蘇りの奇跡を 3 回に限定する必要はない。

2. アウトライン
   (1) 喜びの行列（11 節）
   (2) 悲しみの行列（12 節）
   (3) 2 つの行列の衝突（13～15 節）
   (4) 人々の驚き（16～17 節）

3. 結論
   (1) エリヤの奉仕
   (2) エリシャの奉仕
   (3) イエスの奉仕

やもめの一人息子の蘇生について学ぶ。

Ⅰ．喜びの行列（11 節）

1. 11 節

Luk 7:11　それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大勢の群衆も一緒に行った。

(1)「それから間もなく」

①時間の経過は、あいまいである。
②ここに蘇生物語が置かれている理由がある。
③次回取り上げるバプテスマのヨハネとの対話のための準備となっている。

(2) イエスは、カペナウムからナインへ行かれた。
①カペナウムの南西約 30 キロの町。旧約聖書にはその名は出ていない。
＊ヘブル語のナイム（心地よい）から出ている。
②ヨセフスは、ガリラヤからエルサレムに上る途中にある町だと書いている。
＊ナザレから南に約 10 ㎞の距離である。
③イズレエルの谷の中央にイズレエルという町があり、西にカルメル山がある。
④その間に、タボル山、ナザレ、メギド、そしてナインなどが位置する。
⑤細い道を上って町に入る。道の両側に埋葬用の洞窟が無数にある。
（例話）ヨッシーの質問　新約聖書ではナインについてどう書かれているのか。
＊エリヤとエリシャが奉仕をした地域である。

(3) イエスの後には、弟子たちと大勢の群衆が付いて来ていた。
①弟子たちと弟子でない人たちがいた。
②この行列は、喜びと希望に満ちていた。

Ⅱ．悲しみの行列（12 節）

1．12 節

Luk 7:12　イエスが町の門に近づかれると、見よ、ある母親の一人息子が、死んで担ぎ出されるところであった。その母親はやもめで、その町の人々が大勢、彼女に付き添っていた。

(1) ナインの町には城壁はなかった。
①家並の間の空間に造られた門で、道路がそこから町中に入っていたのであろう。
②イエスが門に近づくと、葬送の行列がやって来た。

(2) この葬送は、非常に悲劇的であった。
①ひとり息子の死
②ひとり息子に死なれたやもめは、共同体の慈善にすがって生きるしかない。
③やもめの保護は、旧新約聖書の主要テーマである。
＊特に、神との契約の中の条項として取り上げられる（申命記が重要）。
＊新約聖書では、1 テモ 5：3～16 を参照。

(3) 当時の習慣では、葬送の列が来ると、仕事を止めて参加することになっていた。

①母親が先頭、次に棺、その後に町の人たちが続いた。

(4) ここには、2 つの異質なものの衝突がある。

①悲しみと喜び

②汚れと聖さ

③死と命

Ⅲ．2 つの行列の衝突（13～15 節）

1．13 節

Luk 7:13　主はその母親を見て深くあわれみ、「泣かなくてもよい」と言われた。

(1)「主」（キュリオス）ということばが、ルカの福音書で初めて登場する。

①初代教会の信者たちは、イエスに「主」というタイトルを与えた。

②これは、イエスが旧約聖書の「ヤハウェ」であるという告白である。

③ルカは、後になってから使われる「主」をここで使っている。

④イエスの大いなる奇跡を予期してのことである。

(2) 主のあわれみ

「主はその母親を見て深くあわれみ、」（新改訳 2017）

「主はこの母親を見て、憐れに思い、」（新共同訳）

「主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、」（口語訳）

「痛々しい母親の姿を見てかわいそうに思ったイエスは、」（リビングバイブル）

①ギリシア語では、「スプランクニゾマイ」という動詞である。

②語源は、「スプランクナ」（内臓、腸である。私たちは「心」と言う）である。

③直訳は、「同情のはらわたを持たれ」ということである。

(3) 当時の哲学者たちのことば

「泣いてはいけない。泣いても何もよいことはない」

(4) イエスのことば

「泣かなくてもよい」

①イエスは、悲しみの原因を取り除くことができる。

②イエスは、これから解決を与えようとしておられる。

2．14 節

Luk 7:14　そして近寄って棺に触れられると、担いでいた人たちは立ち止まった。イエスは言

われた。「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」

(1) イエスは棺に触れられた。

①当時のユダヤ人たちは、箱型の棺は使用していなかった。

②一枚の板の上に亜麻布でくるんだ死体を載せて運んでいた。

③棺に触れると、1 日の間汚れた者となる（民 19：22）。

④死体に触れると、7 日間汚れた者となる（民 19：11）。

＊死体に触れると、最も強い汚れを受けることになる。

＊通常は、家族だけが死んだ者に触れる。

⑤汚れた物は、汚れていない人に影響を与える。

⑥イエスの場合はその逆で、影響力はイエスから汚れた物に向かって流れる。

(2) 棺を担いでいた人たちは、立ち止まった。

①イエスのうわさがこの町にも届いていたのであろう。

②彼らは、イエスが何をするのか見守った。

(3)「若者よ。あなたに言う、起きなさい」

①「青年」（ネアニスコス）は、40 歳以下の者を指すことばである。

②イエスは、ことばを発するだけで、死に勝利された。

③イエスのことばには、創造主の力と権威がある。

2. 15 節

Luk 7:15　すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めた。イエスは彼を母親に返された。

(1) 死人が起き上がって、ものを言い始めた。

①青年が生き返ったことの明確な証拠である。

(2) イエスは、彼を母親に返された。

①青年に信仰があったわけではない。

②母親に信仰があったわけでもない。

③受ける側の信仰は問われていない。

④ここでは、イエスのあわれみが、この奇跡を起こしたのである。

⑤エリヤの奇跡物語を想起させる（1 列 17：23）。

Ⅳ. 人々の驚き（16～17 節）

1. 16 節

Luk 7:16　人々はみな恐れを抱き、「偉大な預言者が私たちのうちに現れた」とか、「神がご自分の民を顧みてくださった」と言って、神をあがめた。

(1) 人々は恐れを抱いた。

①人々とは、ユダヤ人の指導者たちではなく、一般庶民である。

(2) 人々は神をあがめた。

①エリヤやエリシャを思い出し、「偉大な預言者」と言っている。

②エリヤの活動場所は、イズレエル、カルメル山であった。

③エリシャの活動場所は、シュネム、カルメル山であった。

(3) 神がその民を顧みてくださった。

①彼らは、イエスを偉大な預言者と見た。

②ただし、神ご自身が人の姿を取って来てくださったことまでは知らなかった。

2. 17 節

Luk 7:17　イエスについてのこの話は、ユダヤ全土と周辺の地域一帯に広まった。

(1) ヨルダンの向こうの地（ペレア）にも広まった。

①次回取り上げる「バプテスマのヨハネとの対話」につながっていく。

結論

1. エリヤの奉仕

(1) エリヤは、ツァレファテのやもめの息子を蘇生させた（1 列 17：17～24）。

(2) 彼は、3 度その子の上に身を伏せた。

1Ki 17:21　そして、彼は三度その子の上に身を伏せて、【主】に叫んで祈った。「私の神、【主】よ。どうか、この子のいのちをこの子のうちに戻してください。」

1Ki 17:22　【主】はエリヤの願いを聞かれたので、子どものいのちがその子のうちに戻り、その子は生き返った。

2. エリシャの奉仕

(1) エリシャは、シュネムのやもめの息子を蘇生させた（2 列 4：18～37）。

(2) 彼はその子の上に身を伏せた。息子は 7 回くしゃみをした。

2Ki 4:33　エリシャは中に入り、戸を閉めて、二人だけになって【主】に祈った。

2Ki 4:34　それから、寝台の上に上がり、その子の上に身を伏せ、自分の口をその子の口の上に、自分の目をその子の目の上に、自分の両手をその子の両手の上に重ねて、その子の上に身をかがめた。すると、その子のからだが温かくなってきた。

2Ki 4:35　それからエリシャは降りて、部屋の中をあちらこちらと歩き回り、また寝台の上に上がり、子どもの上に身をかがめると、子どもは七回くしゃみをして目を開けた。

3. イエスの奉仕

(1) しかしイエスは、ことばだけでナインの一人息子を甦らせた。

(2) イエスは、死人がいかなる状態であっても、甦らせることができた。

①会堂司ヤイロの娘（マタ 9 章、マコ 5 章、ルカ 8 章）

＊埋葬されていなかった。

②やもめの一人息子（ルカ 7 章）

＊埋葬の途中であった。

③ラザロ（ヨハ 11 章）

＊埋葬されていた。

(3) 霊的適用が可能である。

①イエスは、神が人となられたお方である。

②イエスは、いかなる罪人でも霊的に甦らせることができる。

ルカの福音書　34 回
バプテスマのヨハネの疑問
ルカ 7：18〜35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスは、カペナウム周辺の町や村で、奇跡を行われた。

＊百人隊長のしもべが癒された。

＊やもめの一人息子が生き返った。

②当然、イエスとは誰かという疑問が湧いてくる。

＊預言者か、エリヤか、それ以外の預言者のひとりか。

＊モーセのような預言者か（申 18：18）、メシアか。

＊インマヌエルと呼ばれるお方か（イザ 7：14）。

(2) バプテスマのヨハネも戸惑った。

①イエスは、メシア預言を成就しておられた。

＊義を宣べ伝え、病人を癒し、悪霊を追い出し、死者を甦らせた。

②しかし、成就していないメシア預言もあった。

＊囚人の解放（ヨハネはその 1 人であった）

＊イスラエルの敵の裁き

＊ダビデ王国の回復

(3) ルカは、イエスは誰かという論争について詳細に書いた。

＊並行箇所は、マタ 11：2〜19。

①イエスを信じる者は、同じような論争に巻き込まれる。

②この箇所は、読者を励ますために書いたものである。

＊特に、宗教的指導者たちへの叱責が中心テーマである。

2. アウトライン

(1) ヨハネの疑問に対するイエスの回答（18〜23 節）

(2) ヨハネに関するイエスの証言（24〜28 節）

(3) 不信仰な世代に対するイエスの叱責（29〜35 節）

3. 結論：3 つの教訓

(1) バプテスマのヨハネ

(2) イエス

(3) 宗教的指導者たち

イエスとは誰かを確認する。

Ⅰ．ヨハネの疑問に対するイエスの回答（18～23 節）

1. 18～19 節

Luk 7:18　さて、ヨハネの弟子たちは、これらのことをすべてヨハネに報告した。すると、ヨハネは弟子たちの中から二人の者を呼んで、

Luk 7:19　こう言づけて、主のもとに送り出した。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか。」

(1)「これらのこと」

①ヨハネの弟子たちは、イエスの活動全体をヨハネに報告した。

②百人隊長のしもべの癒し、ナインの一人息子の蘇生などが含まれる。

(2) 当時、ヨハネの確信は揺らいでいた。

①イザ 61：1

Isa 61:1　【神】である主の霊がわたしの上にある。／貧しい人に良い知らせを伝えるため、／心の傷ついた者を癒やすため、／【主】はわたしに油を注ぎ、／わたしを遣わされた。／捕らわれ人には解放を、／囚人には釈放を告げ、

②囚人である自分は、まだ解放されていない。

＊当時彼は、ヘロデ大王が建設したマカイロスの砦に幽閉されていた。

＊死海の北端から約 15 キロ東側に入った所にある。

＊イエスの時代のペレヤの南端に位置する。

③そこでヨハネは、2 人の弟子をイエスのもとに派遣した。

④イエスは、メシアなのか、メシアの先駆者であるエリヤなのか。

2. 20 節

Luk 7:20　その人たちはみもとに来て言った。「私たちはバプテスマのヨハネから遣わされて、ここに参りました。『おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか』と、ヨハネが申しております。」

(1) ヨハネの質問の内容が、くり返されている。

①何が問題になっているかが強調されている。

②イエスの正体について、ヨハネは戸惑っていた。

3. 21～23 節

Luk 7:21　ちょうどそのころ、イエスは病気や苦しみや悪霊に悩む多くの人たちを癒やし、また目の見えない多くの人たちを見えるようにしておられた。
Luk 7:22　イエスは彼らにこう答えられた。「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツァラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。
Luk 7:23　だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」

(1) イエスは、いくつかのメシア預言の成就（奇跡）に言及された。
①ツァラアト患者の清めに関しては、イザヤ書の預言にはない。
②恐らくイエスは､エリシャの奉仕を成就したという点に言及されたのであろう。
＊列王記第二５章　アラムの将軍ナアマンの癒し

(2) 裁きの奉仕に関する言及はない。
①それは再臨のメシアの奉仕に含まれるものである。

(3)「だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです」
①イエスが行ったしるしを見て、イエスをメシアと信じる者は幸いである。
②ヨハネは、それとは異なった理解を持ったために、イエスにつまずいた。
③つまずきは、信仰とは正反対の心の状態である。

Ⅱ．ヨハネに関するイエスの証言（24～28 節）

1．24～26 節

Luk 7:24　ヨハネの使いが帰ってから、イエスはヨハネについて群衆に話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。
Luk 7:25　では、何を見に行ったのですか。柔らかな衣をまとった人ですか。ご覧なさい。きらびやかな服を着て、ぜいたくに暮らしている人たちなら宮殿にいます。
Luk 7:26　では、何を見に行ったのですか。預言者ですか。そのとおり。わたしはあなたがたに言います。預言者よりもすぐれた者をです。

(1) イエスに質問したことで、ヨハネを疑う人が出る可能性がある。
①そこでイエスは、その誤解を解くために、ヨハネを高く評価する。

(2) ヨハネの描写
①風に揺れる葦ではない。
②宮殿で地上の王に仕えているのではなく、天の王に仕えている。
③服を見れば、預言者であることが分かる。

④預言者以上の者である。

2. 27～28 節

Luk 7:27　この人こそ、／『見よ、わたしはわたしの使いを／あなたの前に遣わす。／彼は、あなたの前にあなたの道を備える』／と書かれているその人です。

Luk 7:28　わたしはあなたがたに言います。女から生まれた者の中で、ヨハネよりも偉大な者はだれもいません。しかし、神の国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。

(1) イエスはヨハネのことを、「メシアの先駆者」と断言した。

①マラ 3：1 の引用

Mal 3:1　「見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。／彼は、わたしの前に道を備える。／あなたがたが尋ね求めている主が、／突然、その神殿に来る。／あなたがたが望んでいる契約の使者が、／見よ、彼が来る。／――万軍の【主】は言われる。」

②イエスは、「あなたがたが尋ね求めている主」である。

③イエスの神性が確認されている。

(2) ヨハネは、旧約聖書の聖徒の中では最も偉大である。

①しかし、神の国の中で一番小さい者でさえ、彼より偉大である。

②神の国＝神の国のプログラム。マタ 16 章の教会。

③教会時代の聖徒たちは、ヨハネよりも偉大である。

④キリストの内にあるので、偉大である。

Ⅲ. 不信仰な世代に対するイエスの叱責（29～35 節）

1. 29～30 節

Luk 7:29　ヨハネの教えを聞いた民はみな、取税人たちでさえ彼からバプテスマを受けて、神が正しいことを認めました。

Luk 7:30　ところが、パリサイ人たちや律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けず、自分たちに対する神のみこころを拒みました。

(1) ヨハネの評価に関して、イスラエルの中には分裂があった。

①29 と 30 節は、マタイの福音書の並行箇所には出てこない。

②ルカは、31～35 節のイエスのことばの背景を提供している。

(2) イエスは、一般民衆をほめた。

①取税人でさえ、ヨハネの教えを信じて、バプテスマを受けた。

②彼らは、神の方法が正しいことを認めた。

③つまり、自分の考えをヨハネに押しつけなかったということである。

(3) イエスは、霊的指導者たちを叱責した。

①パリサイ人たちや律法学者たちは、ヨハネからバプテスマを受けなかった。

②つまり、神が用意された救いの道を拒否したということである。

2. 31～32 節

Luk 7:31　それでは、この時代の人々を何にたとえたらよいでしょうか。彼らは何に似ているでしょうか。

Luk 7:32　広場に座り、互いに呼びかけながら、こう言っている子どもたちに似ています。／『笛を吹いてあげたのに、／君たちは踊らなかった。／弔いの歌を歌ってあげたのに、／泣かなかった。』

(1) この時代の人々とは、第 2 グループの不信仰な人たちである。

①過去にも、不信仰な世代は存在していた。

②申 32：20、詩 78：8、エレ 2：31

Deu 32:20　主は言われた。／「わたしの顔を彼らから隠し、／彼らの終わりがどうなるかを見よう。／彼らは、ねじれた世代、／真実のない子らであるから。

Psa 78:8　先祖たちのように／強情で逆らう世代／心定まらない世代／霊が神に忠実でない世代とならないために。

Jer 2:31　あなたがた、この時代の人々よ。【主】のことばに心せよ。／わたしはイスラエルにとって荒野であったのか。／あるいは暗黒の地であったのか。／なぜわたしの民は、／「私たちは、さまよい歩きます。／もうあなたのところには行きません」／と言うのか。

(2) 不信仰な人たちは、気ままな子どもたちのようである。

①気ままな子どもたちは、自分の思いどおりに他の子どもたちを動かそうとする。

②彼らは、笛を吹いたり、弔いの歌を歌ったりする。

③しかし、他の子どもたちは、それに従わない。

④そこで、気ままな子どもたちは、文句を言う。

3. 33～35 節

Luk 7:33　バプテスマのヨハネが来て、パンも食べず、ぶどう酒も飲まずにいると、あなたがたは『あれは悪霊につかれている』と言い、

Luk 7:34　人の子が来て食べたり飲んだりしていると、『見ろ、大食いの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言います。

Luk 7:35　しかし、知恵が正しいことは、すべての知恵の子らが証明します。」

(1) 彼らは、バプテスマのヨハネを批判した。

①ヨハネは、禁欲生活をし過ぎである。
②ヨハネは、いなごと野蜜を食べた。パンも食べず、ぶどう酒も飲まなかった。
③つまり、ヨハネは、宗教的指導者たちの期待通りには動かなかったのである。
④そこで彼らは、ヨハネは悪霊につかれていると言った。

(2) 彼らは、全く別の理由で、イエスを批判した。
①イエスは、放縦に走っている。
②イエスは、取税人や罪人とともに、飲み食いした。
③つまり、イエスは、彼らの期待通りには動かなかったのである。
④そこで彼らは、イエスは罪人の仲間だと言った。

(3) イエスは、ご自分のことを「人の子」と呼ばれた。
①これは、メシアの称号である（ダニ 7：13～14）。
②これは、イエスの神性を示すタイトルである。
③神であるイエスを拒否することは、重大な罪である。

(4)「知恵が正しい」とは、イエスとヨハネのことである。
①イエスとヨハネは、神の御心に従ったという意味で、「知恵の子ら」である。
②イエスとヨハネは、「知恵の子ら」として行動している。
③イエスとヨハネを信じた者たちもまた、「知恵の子ら」である。
④彼らは、新しい生き方を通して、イエスとヨハネが義であることを証明する。

結論：3 つの教訓

1. バプテスマのヨハネ

(1) 彼は、悔い改めの重要性を教えた。
(2) 禁欲的なライフスタイルは、悔い改めの表現である。
(3) 救いに至る最初のステップは、自らの罪を認めることである。

2. イエス

(1) イエスの自由なライフスタイルは、救われた者の喜びの表現である。
(2) イエスを信じた者は、イエスとともに食事の席に着くことになる。

3. 宗教的指導者たち

(1) 彼らは、ヨハネとイエスを、自分たちの思いどおりに動かそうとした。
(2) 自分の現状を直視できない者は、福音の使者の内に常に欠点を見いだす。

2022 年 06 月 12 日（日）　35 回　罪深い女による油注ぎ

ルカの福音書　35 回
罪深い女による油注ぎ
ルカ 7：36～50

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスは、数々の恵みの業を行われた。

②イスラエルの中に、イエスとは誰かという論争が続いた。

③バプテスマのヨハネも、同じ疑問を抱いた。

＊イエスは彼に、自分はメシアだと回答された。

＊そして、バプテスマのヨハネを高く評価された。

＊しかし、彼よりも教会時代の信者の方が偉大だと言われた。

④この箇所では、シモンというパリサイ人がイエスを吟味しようとした。

(2) イエスは 3 度パリサイ人から食事に招かれている（すべてルカだけの記録）。

①7：36～50、11：37～54、14：1～24

②かなり長い場面になっている。

③なんらかの論争が起きている。

④3 度のくり返しは、これが公生涯の特徴であることを示している。

(3) この物語は、ルカ 7：35 が正しいことの証明となっている。

Luk 7:35　しかし、知恵が正しいことは、すべての知恵の子らが証明します。」

①知恵（バプテスマのヨハネ、イエス）は正しい。

②知恵を信じた者たちは、知恵の子らである。

③知恵の子らの行いは、知恵が正しいことを証明している。

④イエスを信じた罪の女の行いが、イエスの教えの正しさを証明している。

⑤さらに、イエスは誰かというモチーフがここでも流れている。

2. アウトライン

(1) 舞台設定（36 節）

(2) 罪の女の登場（37～39 節）

(3) ラビの講話（40～47 節）

(4) 講話の結論（48～50 節）

3. 結論：5 つの教訓

イエスは、罪を赦す神であることを確認する。

Ⅰ．舞台設定（36 節）

1．36 節

Luk 7:36　さて、あるパリサイ人が一緒に食事をしたいとイエスを招いたので、イエスはそのパリサイ人の家に入って食卓に着かれた。

(1) 宴会は、宗教的、道徳的講話を聞く場となっていた。

①ラビを招いてこのような宴会を開くことは、高潔なことだと考えられていた。

②これは、巡回ラビに敬意を表するための宴会である。

③一般の人たちにも扉が開かれており、傍聴が許された。

④貧しい人たちは、宴会の残り物を食べることができた。

⑤イエスは、パリサイ人の招きをすべて断ったわけはない。

(2) 主人は、パリサイ人のシモンである。

①彼は、イエスに敬意を示すためではなく、別の目的のために宴会を開いた。

②彼の動機は、隠されていた。

＊イエスをもてなすわけではないが、敵対するわけでもない。

＊彼は、イエスがメシアであるかどうかを疑っている段階にいた。

Ⅱ．罪の女の登場（37～39 節）

1．37～38 節

Luk 7:37　すると見よ。その町に一人の罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏の壺を持って来た。

Luk 7:38　そしてうしろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらイエスの足を涙でぬらし始め、髪の毛でぬぐい、その足に口づけして香油を塗った。

(1)「罪深い女」（罪の女）とは、娼婦の婉曲語である。

①当時は、異邦人の娼婦もたくさんいたが、彼女はユダヤ人である。

②彼女は、ベタニヤのマリアでもマグダラのマリアでもない。

③彼女がこのような場にいるのは、異常なことである。

④通常は、戸口に召使が立っていて、入室を制限していた。

⑤宗教的な家では、誰でも中に入って話を聞けるように、扉を開いていた。

⑥傍聴者は食卓から離れて立ち、黙ってラビと主人の対話に話に耳を傾けた。

(2) 彼女の行動

①香油の入った石膏の壺を持って来た。

＊石膏（アラバスター）は、香油を入れるのに最適な器とされていた。

②泣いていた。

③イエスのうしろで御足のそばに立った。

＊左ひじをついて、横になって食事をしていたので、足は外側にあった。

④涙でイエスの足をぬらし

⑤髪の毛でぬぐい

＊宗教的な婦人は、頭にかぶり物をしていた。

＊公の場で髪の毛を見せることは、不道徳なことであった。

＊トップレスで公の場に出るようなものである。

⑥その足に口づけして

＊継続した動作（未完了形）

⑦香油を塗った。

＊頭ではなく足に油を塗ったのは、彼女の謙遜の表れである。

＊香油は、遊女が商売で使用する物で、パリサイ人には忌むべきものである。

2. 39 節

Luk 7:39　イエスを招いたパリサイ人はこれを見て、「この人がもし預言者だったら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っているはずだ。この女は罪深いのだから」と心の中で思っていた。

(1) パリサイ人シモンは、心ひそかにイエスについての結論を出した。

①イエスは、預言者ではない。

②もし預言者であるなら、罪の女にさわらせることはないはずだ。

③罪人に触れると、汚れが移る。

Ⅲ. ラビの講話（40～47 節）

1. 40 節

Luk 7:40　するとイエスは彼に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがあります」と言われた。シモンは、「先生、お話しください」と言った。

(1) 家の主人、招かれた客、傍聴人がいる中で、いよいよラビの講話が始まる。

①講話は、たとえ話と質疑応答の形で、展開される。

②この講話で、イエスはシモンの心の中を見抜いていることを証明される。

(2) シモンは、「先生、お話しください」と言った。

①シモンは、イエスが自分の心の中を見抜いていることを知らない。

②彼は、丁寧に「先生」と言った。

③ルカでは「先生」とはラビのことである。ラビは、預言者以下の者。

2. 41～42 節

Luk 7:41　「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリ、もう一人は五十デナリ。

Luk 7:42　彼らは返すことができなかったので、金貸しは二人とも借金を帳消しにしてやった。それでは、二人のうちのどちらが、金貸しをより多く愛するようになるでしょうか。」

(1) 500 デナリの借金を赦された人と、50 デナリの借金を赦された人の対比

①1 デナリは、労働者の 1 日分の賃金である。

②借金の額は、10 対 1 である。

③金貸しは、2 人に恵みを与えた。

④話のポイントは、どちらがより多くその金貸しを愛するかということである。

3. 43 節

Luk 7:43　シモンが「より多くを帳消しにしてもらったほうだと思います」と答えると、イエスは「あなたの判断は正しい」と言われた。

(1) シモンは、用心深く回答した。

①「思います」は、用心深いことばである。

(2) イエスは、彼の判断をほめた。

①この判断によって、シモンは自分自身を裁くことになる。

4. 44～47 節

Luk 7:44　それから彼女の方を向き、シモンに言われた。「この人を見ましたか。わたしがあなたの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、彼女は涙でわたしの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐってくれました。

Luk 7:45　あなたは口づけしてくれなかったが、彼女は、わたしが入って来たときから、わたしの足に口づけしてやめませんでした。

Luk 7:46　あなたはわたしの頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、彼女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。

Luk 7:47　ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」

(1) ここから、たとえ話の適用が始まる。

①イエスは、このたとえ話を罪の女とシモンに適用する。

(2) 主人が客を歓迎するために行うことがいくつかあった。
①足を洗う（通常は、その家のしもべの仕事であった）。
②男性同士は、頬に口づけをする。
③頭に油を塗る。
④しかしシモンは、それをしなかった。
⑤敬意を表しているかのように振る舞いながら、実はイエスを見下していた。

(3) 罪の女は、そのすべてを、しかも、謙遜に行った。
①涙で足をぬらし、髪の毛でぬぐった。
②足に口づけしてやめなかった。
③足に香油を塗った。
④多く赦されたことへの感謝を、これらの行動で表現した。

(4) シモンには、赦されたという思いがない。
①それどころか、赦される必要があるとも感じていない。

Ⅳ．講話の結論（48～50 節）

1．48～49 節

Luk 7:48　そして彼女に、「あなたの罪は赦されています」と言われた。
Luk 7:49　すると、ともに食卓に着いていた人たちは、自分たちの間で言い始めた。「罪を赦すことさえするこの人は、いったいだれなのか。」

(1) ここでイエスは、公に彼女の罪の赦しを確認された。
①「赦されています」は、完了形の動詞である。
＊イエスを信じた時点で、彼女は赦された。
＊そして今も、赦された状態が続いている。
＊イエスは、彼女の罪が赦されていることを確認された。
②この宣言は、彼女が共同体の中で新しい人生を歩むために必要なものである。
③イエスは、メシア宣言はしていないが、メシアとして語っている。

(2) 食卓に着いていた人たちは、驚いた。
①神だけが罪を赦す権威を持っておられる。
②祭司は、代償のささげ物が献げられた後、罪の赦しを宣言することができた。
③イエスは、代償のささげ物なしに、罪の赦しを宣言された。
＊十字架の死が代償のささげ物となる。
④彼らは、イエスを信じるか、拒否するかの判断を迫られた。

2. 50 節

Luk 7:50　イエスは彼女に言われた。「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

(1) イエスは、信仰による救いを保証された。

①彼女は、愛の行為によって救われたのではない。

②愛の行為は、イエスを信じた結果出てきたものである。

(2)「Go in peace.」(安心して行きなさい)

①彼女は、永遠の平安をいただいて帰ることができた。

②信仰による救いを得ていたからである。

結論：5 つの教訓

1. 救いは、恵みと信仰によってのみ与えられる。
   (1) パリサイ人シモンには、罪の認識がなかった。
   (2) それゆえ、信仰による救いを求める必要がなかった。

2. 神は、返済不可能な罪の負債を赦してくださる。
   (1) 50 デナリも 500 デナリも、大きな負債である。
   (2) 神は、どのような負債であっても赦してくださる。

3. 神との平和は、罪の赦しによって可能となる。
   (1) 罪の女は、イエスを信じる信仰によって、すでに神との平和を持っていた。
   (2) イエスは、その事実を再確認された。

4. 神の赦しを理解すればするほど、神への感謝は深くなる。
   (1) パリサイ人シモンと罪の女の差は、神の赦しを体験したかどうかの差である。
   (2) 神への感謝が薄れてきたときは、どれほどの罪を赦されたかを思い出せば良い。

5. 謙遜な奉仕は、神の恵みに対する応答として生まれるものである。
   (1) 奉仕が人を救うのではない。
   (2) 救われたから、奉仕がしたくなるのである。

ルカの福音書　36 回

イエスに仕える女たち

ルカ 8：1～3

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスは、数々の恵みの業を行われた。

②イエスは、罪の女の信仰を評価された（ルカだけ）。

③ここでは、イエスに仕える女たちが登場する（ルカだけ）。

(2) イエスの奉仕の原動力

①マタイは、自分のメシア性をユダヤ人に伝えたいというイエスの情熱を強調。

②マルコは、ユダヤ人の霊的指導者たちからの攻撃を強調。

③ルカは、イエスのあわれみの心を強調。

(3) 直近の文脈で、イエスによって助けられた婦人の例が 3 つ出ていた。

①ナインのやもめ（7：12～15）

②罪の女（7：36～50）

③イエスに仕える女たち（8：1～3）

④彼女たちの幾人かは、恵みに応答してイエスの弟子となった。

⑤婦人の物語は、女性読者にとって励ましとなった。

2. アウトライン

(1) 第 2 回ガリラヤ伝道（1 節）

(2) イエスの弟子となった女たち（2～3 節 a）

(3) 女たちの奉仕の内容（3 節 b）

3. 結論：ルカの視点

(1) 男性と女性を対比させている。

(2) 使徒の働きの内容を予見している。

イエスに仕える女たちについて学ぶ。

Ⅰ．第 2 回ガリラヤ伝道（1 節）

1. 1 節

Luk 8:1　その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人も

お供をした。

(1) これは、第 2 回ガリラヤ伝道の要約文である。

①第 1 回ガリラヤ伝道は、4：43～44 に出ていた。

②カペナウムでの奉仕の後のことであった。

Luk 4:43　しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」

Luk 4:44　そしてユダヤの諸会堂で、宣教を続けられた。

(2) イエスの奉仕は、巡回伝道であった。

①弟子集団を伴っていた。

②伝道旅行のために、多額の費用を必要とした。

(3) イエスが宣べ伝えた福音の内容は、「神の国」であった。

①バプテスマのヨハネは、神の国の到来を宣言した（マタ 3：1～2）。

②ルカ 17：20～21

Luk 17:20　パリサイ人たちが、神の国はいつ来るのかと尋ねたとき、イエスは彼らに答えられた。「神の国は、目に見える形で来るものではありません。

Luk 17:21　『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」

③イスラエルは、イエスを拒否する。

④その結果、教会が誕生し、異邦人の救いの時代が始まる。

⑤神の国の計画は、今も生きている。

⑥メシアの再臨と地上における千年王国の成就がそれである。

(3)「十二人」ということばが、ここで初めて登場する。

①彼らは、イエスの公生涯の期間、イエスと生活をともにした。

Ⅱ．イエスの弟子となった女たち（2～3 節 a）

1．2～3 節 a

Luk 8:2　また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、

Luk 8:3a　ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。

(1) イエスに仕えたのは、悪霊を追い出され、病気を治してもらった女たちである。

①彼女たちは、イエスのあわれみに応答して、イエスの弟子となった。

②愛による応答だけが、真の弟子になる方法である。
③イエスの弟子になるのは、男性だけの特権ではない。

(2) マグダラの女と呼ばれるマリア
①マリア（ミリアム）は、人気のある名前である。
②他と区別するために、マグダラという町の名を頭につけた。
＊ガリラヤ湖西岸の町である。
＊当時の町が発掘されている。
③彼女は、イエスの足に香油を注いだ罪の女とは別人である。
④また、ベタニヤのマリアとも別人である。
⑤彼女は、7 つの悪霊を追い出してもらった。
＊彼女の内に 7 つの悪霊がいた（完全数）。
＊他の悪霊憑きの例を見ると、結果は不道徳ではなく、理性の混乱である。
⑥彼女は、イエスの忠実な弟子となった。
＊後に、イエスの復活を目撃する最初の証人となる。

(3) ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ
①このヘロデは、ヘロデ・アンティパスである。
②彼女の夫クーザは、ヘロデの執事であった。
＊「家令」（新共同訳）
＊「steward」（KJV）
＊つまり、ヘロデの宮廷で仕える高官である。
③クーザは、ヨハ 4：46 の役人（息子が病気であった）と同一人物かもしれない。
④もしそうなら、夫婦揃ってイエスに感謝を覚えたはずである。
⑤初代教会の中に貴族階級の弟子たちがいたが、この夫婦の影響であろう。
⑥ヨハンナは、後に、イエスの復活の証人となる。
⑦イエスの包容力に注目しよう。
＊マグダラのマリアとヨハンナは、対極にある人物である。

(4) スザンナ
①詳しい情報はないが、最初の読者たちには意味のある人物だったと思われる。

(5) そのほか多くの女たち
①名前が上がっているのは 3 人だけである。
②それ以外にも、多くの女性の弟子たちがいた。

Ⅲ．女たちの奉仕の内容（3 節 b）

1．3 節 b

Luk 8:3b　彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。

(1) イエスの巡回伝道は、彼女たちの経済的援助によって支えられた。

①食事、衣服、宿舎などを用意する必要があった。

②当時の地中海世界では、宗教家や哲学者を援助するパトロンが多くいた。

②男性だけでなく、女性の中にもパトロンになる者たちがいた。

(2) 彼女たちの犠牲は、経済的なものだけではなかった。

①男性の一行とともに旅をするのは、恥ずべきことであった。

②男女共学のない時代に、男性の弟子たちといっしょに学ぶのは恥ずべきこと。

③彼女たちは、家庭での責務を一時的に放棄して、イエスに従った。

④家族よりも神を第 1 にするという教えは、女性の弟子たちにも適用される。

⑤彼女たちの献身は、ユダヤ人の習慣に対する挑戦であった。

結論：ルカの視点

1．男性と女性を対比させている。

(1) ゼカリヤとマリア（1～2 章）

(2) ツァレファテのやもめとシリア人ナアマン（4：25～27）

(3) 悪霊に憑かれた男とシモンのしゅうとめ（4：31～39）

(4) 百人隊長とナインのやもめ（7：1～17）

(5) 羊を持つ男と銀貨を持つ女（15：3～10）

2．使徒の働きの内容を予見している。

(1) 12 人は、イエスの公生涯の目撃者である。

①使徒の資格（使 1：21～22）

Act 1:21　ですから、主イエスが私たちと一緒に生活しておられた間、

Act 1:22　すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした人たちの中から、だれか一人が、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」

②公生涯の間イエスと行動とともにしたこと、そして、復活を目撃したこと。

③イスカリオテのユダに代わってマッテヤが使徒になった。

④彼らは、教会の土台である。

⑤「使徒たちの教え」は、神のことばである。

(2) 女たちへの言及は、彼女たちがイエスの復活の証人になることの準備である。

①ルカ 24：1

Luk 24:1　週の初めの日の明け方早く、彼女たちは準備しておいた香料を持って墓に来た。

②使 1：14

Act 1:14　彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。

ルカの福音書　37 回

土壌のたとえ

ルカ 8：4〜15

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスは、数々の恵みの業を行われた。

②イエスは、罪の女の信仰を評価された（ルカだけ）。

③イエスに仕える女たちが登場した（ルカだけ）。

(2) イエスは、たとえを用いて教えられた（ルカ独特）

①ルカ 8：4〜21 の内容

＊土壌のたとえ（4〜15 節）

＊燭台のたとえ（16〜18 節）

＊イエスの母と兄弟たち（19〜21 節）

②今回は、土壌のたとえを取り上げる。

(3) 共観福音書の中のたとえ

①マタイの福音書は、最も多くのスペースを割いている（13 章）。

②マルコの福音書は、2 番目に多くのスペースを割いている（4 章）。

③ルカは、2 つのたとえに限定している。

＊神のことばを聞くこと、従うこと、伝えることの重要性を強調している。

2. アウトライン

(1) 土壌のたとえ（4〜8 節）

(2) たとえを用いる理由（9〜10 節）

(3) たとえの解き明かし（11〜15 節）

3. 結論

(1) 土壌のたとえのまとめ

(2) 土壌のたとえの重要性

土壌のたとえについて学ぶ。

Ⅰ．土壌のたとえ（4〜8 節）

1. 4 節

Luk 8:4　さて、大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がみもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。

(1) ルカは、このたとえが語られた背景を省略している。

①マタ 13 章とマコ 4 章では、場所はガリラヤ湖畔である。

(2) ルカが強調しているのは、聴衆の多様性である。

①大勢の群衆

②方々の町から

③多様な聴衆の中に、4 種類の土壌を見いだすことができる。

④この節は、イエスの教えを聞く人たちへの警告になっている。

(3) このたとえの中心点

①種を蒔く人（イエスや弟子たち）ではない。

②種（神のことば）でもない。

③種が落ちた土壌（聞く人の心）が中心点である。

(4) 当時の農業

①一般的には、土地を耕してから種を蒔いた。

②しかし、種を蒔いてから耕すこともあった。

③そのため、種はさまざまな土壌に落ちた。

④種を蒔く人は、種を手に取り、それをまき散らした。

2. 5 節

Luk 8:5　「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。

(1) 道端に落ちた種

①その種は、人に踏みつけられた（ルカだけの表現）。

＊ヘブ 10：29

Heb 10:29　まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。

②その種は、空の鳥に食べられた（空の鳥は悪魔の象徴である）。

＊創 15：11

Gen 15:11　猛禽がそれらの死体の上に降りて来た。アブラムはそれらを追い払った。

3. 6 節

Luk 8:6　また、別の種は岩の上に落ちた。生長したが、水分がなかったので枯れてしまった。

(1) 岩の上に落ちた種

①成長した。

②水分がなかったので枯れてしまった（ルカだけの表現)。

＊土壌が薄い。

＊エレ 17：7～8

Jer 17:7　【主】に信頼する者に祝福があるように。／その人は【主】を頼みとする。

Jer 17:8　その人は、水のほとりに植えられた木。／流れのほとりに根を伸ばし、／暑さが来ても暑さを知らず、／葉は茂って、／日照りの年にも心配なく、／実を結ぶことをやめない。

4. 7 節

Luk 8:7　また、別の種は茨の真ん中に落ちた。すると、茨も一緒に生え出てふさいでしまった。

(1) 茨の真ん中に落ちた種

①茨も一緒に生え出てふさいでしまった。

＊ヘブ 6：8

Heb 6:8　茨やあざみを生えさせる土地は無用で、やがてのろわれ、最後は焼かれてしまうのです。

5. 8 節

Luk 8:8　また、別の種は良い地に落ち、生長して百倍の実を結んだ。」イエスはこれらのことを話しながら、大声で言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」

(1) 良い地に落ちた種

①成長して 100 倍の実を結んだ。

＊パレスチナでは、10 倍の収穫が普通であった。

＊マタ 13：8

Mat 13:8　また、別の種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった。

(2) イエスは、大声で言われた。

①「聞く耳のある者は聞きなさい」

②これは、たとえの最後に語る常套句である。

③霊的な人はたとえの意味を理解できる。

④そうでない人は、表面的な意味しか理解できない。

Ⅱ．たとえを用いる理由（9～10 節）

1．9～10 節

Luk 8:9　弟子たちは、このたとえがどういう意味なのか、イエスに尋ねた。

Luk 8:10　イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。／『彼らが見ていても見ることがなく、／聞いていても悟ることがないように』／するためです。

(1) 弟子たちは、このたとえ（単数形）の意味をイエスに尋ねた。

①イエスは、その意味を解説する前に、たとえで教える理由を説明された。

(2)「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが」

①奥義とは、今まで隠されていたが新しく啓示された真理である。

②当時の人たちは、ギリシア人の神秘宗教のことを良く知っていた。

＊その宗教には神秘（奥義）があり、入信した者だけがそれを知らされた。

③イエスを信じた者は、神の国の奥義を知るようになった。

(3)「ほかの人たちには、たとえで話します」

①イエスの弟子たちは、深い意味を理解することができる。

②弟子でない者たちは、表面的な意味しか理解できない。

＊見ていても見ることがない。

＊聞いていても悟ることがない。

Ⅲ．たとえの解き明かし（11～15 節）

1．11～12 節

Luk 8:11　このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。

Luk 8:12　道端に落ちたものとは、みことばを聞いても信じて救われないように、後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう、そのような人たちのことです。

(1) たとえの意味の解き明かしが始まる。

①種は神のことばである。

②種が落ちる土壌は、聞く人の心である。

③豊かな収穫を得るためには、人間の側の応答が極めて重要である。

(2) 道端に落ちたものが象徴している人とは

①みことばを聞いても信じて救われない人

②悪魔が、その心からみことばを取り去ってしまうので、救われない。

③みとばの内容は、イエスは神が人となられたメシアであるということである。

④ルカは、魂の救いに大きな関心を抱いていた。

2. 13～14 節

Luk 8:13　岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んで受け入れるのですが、根がないので、しばらくは信じていても試練のときに身を引いてしまう、そのような人たちのことです。

Luk 8:14　茨の中に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らはみことばを聞いたのですが、時がたつにつれ、生活における思い煩いや、富や、快楽でふさがれて、実が熟すまでになりません。

(1) 岩の上に落ちたものと茨の中に落ちたもの

①前者は、試練に遭って信仰を捨てる人たちである。

＊極端な例は、迫害の中でいのちを守るために棄教する人たちである。

②後者は、別の関心事があって、信仰の成長が妨げられる人たちである。

(2) イエスは、彼らが救いを失ったかどうかについては沈黙している。

①最初から救われていなかった人たちがいる。

②救われているが、途中で信仰を捨てた人たちがいる。

＊救われているなら、救いを失うことはない。

＊救われている人は、実を結ぶ（外面的に観察できる性質）。

＊実を結ぶまでに時間がかかる人がいる。

＊生涯実を結ばない人もいる。

3. 15 節

Luk 8:15　しかし、良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。

(1) 良い地に落ちたものが象徴している人とは

①みことばに誠実に耳を傾ける。

②それをしっかりと守る。

③忍耐して実を結ぶ（人格的変化）。

結論

1. 土壌のたとえのまとめ

(1) 道端の心の人

①この人は救われていない。

(2) 岩の心の人、茨の心の人

①救われていない人も含まれている。

②救われているなら、救いを失うことはない。

③永遠の救いを論じるよりも、神のことばにどう応答するかを考えるべきである。

(3) 良い地の心の人

①この人は救われている。

②この人は、キリストにとどまり、実を結ぶ人である。

2. 土壌のたとえの重要性

(1) 奥義としての神の国（神の国の奥義）の状態を説明している。

①ユダヤ人がイエスを拒否して以降に登場する霊的状態

②教会時代の霊的状況

(2) 福音の伝達と 4 種類の応答

①すべてのたとえの土台になっているのが、土壌のたとえである。

(3) 良い地になることを願う人

①神の啓示を学ぶときに、それを理解させてくださいと祈る。

②神はその祈りに答えてくださる。

③願わないなら、表面的な理解で終わる。

(4) 出 8：32 と 9：12

Exo 8:32　しかし、ファラオはまたも心を硬くし、民を去らせなかった。

Exo 9:12　しかし、【主】はファラオの心を頑なにされたので、ファラオは二人の言うことを聞き入れなかった。【主】がモーセに言われたとおりであった。

(5) ロマ 9：17～18

Rom 9:17　聖書はファラオにこう言っています。「このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるためである。」

Rom 9:18　ですから、神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままに頑なにされるのです。

ルカの福音書　38 回

燭台のたとえ

ルカ 8：16～21

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスは、数々の恵みの業を行われた。

②イエスは、第 2 回ガリラヤ伝道を行われた。

③イエスに仕える女たちが登場した（ルカだけ）。

④イエスは、たとえを用いて教えられた（ルカ独特）。

＊マタイは、13 章全部をたとえに用いている。

＊マルコは、4 章全部をたとえに用いている。

＊ルカは、2 つのたとえに限定している。

(2) ルカ 8：4～21 の内容

①土壌のたとえ（4～15 節）

②燭台のたとえ（16～18 節）

③イエスの母と兄弟たち（19～21 節）

2. アウトライン

(1) 燭台のたとえ（16～18 節）

(2) イエスの母と兄弟たち（19～21 節）

3. 結論

(1) 燭台のたとえのまとめ

(2) キリストに近づく方法

燭台のたとえとキリストに近づく方法について学ぶ。

Ⅰ．燭台のたとえ（16～18 節）

1. 16 節

Luk 8:16　明かりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする人はいません。燭台の上に置いて、入って来た人たちに光が見えるようにします。

(1) これは、イエスが好んで語られたたとえである。

①当時は、日没後の光源は、土器のランプが中心であった。

②ランプの中にオリーブ油を入れ、芯に火をともした。

③マタ 5：15、マコ 4：21

④ルカ 11：33 で同じたとえがくり返されている。

Luk 11:33　だれも、明かりをともして、それを穴蔵の中や升の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。入って来た人たちに、その光が見えるようにするためです。

(2) 燭台のたとえの 4 つの要素

①明かりをつける人＝主イエス

②明かり＝神の国の奥義

③明かりが燃えている器（ランプ）＝イエスの弟子たち

④燭台＝イエスの弟子たちの行動原則

(3) 神のことばの光をうちに宿した人は、その光を隠してはならない。

①その人には、その光を周りの人たちに見せる責任がある。

2. 17 節

Luk 8:17　隠れているもので、あらわにされないものはなく、秘められたもので知られないもの、明らかにされないものはありません。

(1) 弟子たちには、神の国の奥義が啓示された。

①ルカ 8：10

Luk 8:10　イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。／『彼らが見ていても見ることがなく、／聞いていても悟ることがないように』／するためです。

(2) 奥義とは、それまでに隠されていた真理が啓示されたことを指す。

①イエスは、「奥義としての王国」を弟子たちに啓示された。

②「奥義としての王国」とは、教会時代のことである。

＊イエスは、神の国の王である。

＊イエスをメシアとして信じるなら、神の国に入ることができる。

＊真理に対して 4 種類の応答がある。

(3) 弟子たちは、イエスから「明かり」をもらった。

①弟子たちは、その「明かり」（神の国の奥義）を隠してはならない。

②その「明かり」を周りの人に示すことが、弟子たちの使命である。

3. 18 節

Luk 8:18　ですから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っていると思っているものまで取り上げられるからです。」

(1) このたとえの結論

①イエスの教えをどう聞くかに、注意する必要がある。

②イエスの教えを信じるなら、神はもっと多くの真理を理解させてくださる。

③信じないなら、理解していると思っていたものまで取り上げられる。

＊不信仰なユダヤ人たちの運命を予告しているようである。

Ⅱ．イエスの母と兄弟たち（19～21 節）

1. 19 節

Luk 8:19　さて、イエスのところに母と兄弟たちが来たが、大勢の人のためにそばに近寄れなかった。

(1) ルカがこの逸話をここに置いたのには、理由がある。

①マタ 12：46～50 とマコ 3：31～35 の文脈は、パリサイ人たちとの論争である。

②ルカは、「従順に関する教え」のまとめとして、これを書いている。

③ルカの記録が、最も簡潔である。

(2) イエスの母と兄弟たちがイエスのところに来た。

①大勢の人のためにそばに近寄れなかった。

②これらの兄弟たちは、ヨセフとマリアから誕生した子どもたちである。

2. 20～21 節

Luk 8:20　それでイエスに、「母上と兄弟方が、お会いしたいと外に立っておられます」という知らせがあった。

Luk 8:21　しかし、イエスはその人たちにこう答えられた。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちのことです。」

(1) 肉の家族がイエスに近づけないでいるという情報が伝えられた。

①イエスは、肉の家族関係以上に重要なことがあると言われた。

(2) イエスは、家族の絆や責任を軽視されたのではない。

①神のことばを聞いて行うことの重要性を強調されたのである。

(3) イエスの教えを受け入れ、それを実行する人は幸いである。

①その人は、イエスにとっては家族のような存在となる。

②血縁関係よりも、信仰による関係のほうが重要である。

③良い地の信者は、イエスに近づくことができるようになる。

結論

1. 燭台のたとえのまとめ

(1) 信じて行なうことの重要性が教えられている。

(2) イエスの弟ヤコブは、この教えを良く理解した。

①ヤコ 1：22～23

Jas 1:21　ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。

Jas 1:22　みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけません。

(3) 明かりを受けた人には、それを輝かせるという責任が生じる。

2. キリストに近づく方法

(1) 血の関係を通してではない。

①ユダヤ人であるか、異邦人であるかは、問題ではない。

②信仰こそ重要である。

③ヨハ 1：11～12

Joh　1:11　この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

Joh 1:12　しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。

(2) 主観的な体験はいろいろあり得る。

①祈る時

②聖書を読む時

③大聖堂に入る時

④あるジャンルの音楽を聴く時

⑤自然界に身を置く時

(3) キリストの教えは明白である。

①神のことばを信じ、それを実行する時

ルカの福音書　39 回
嵐を静めるイエス
ルカ 8：22～25

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
   ①イエスは、第 2 回ガリラヤ伝道を行われた。
   ②イエスは、たとえを用いて教えられた（ルカ独特）。
   ③ルカは、土壌のたとえを重視した。
   ＊イエスのことばに耳を傾けよ。
   ＊それを行え。
   ④この箇所では、イエスのことばに対する弟子たちの信仰が試される。
   ⑤ルカはイエスの権威を証明する出来事を記した（4：31～6：16）。
   ⑥再び、イエスの権威を証明する出来事を紹介する（8：22～56）。

   (3) ルカ 8：22～56 の内容（イエスの権威の証明）
   ①嵐を静めるイエス（22～25 節）
   ②悪霊を追い出すイエス（26～39 節）
   ③病と死に打ち勝つイエス（40～56 節）

2. アウトライン
   (1) イエスのことば（22 節）
   (2) 弟子たちの信仰の後退（23～24 節 a）
   (3) イエスの権威（24b～25 節 a）
   (4) 弟子たちの信仰の成長（25 節 b）

3. 結論
   (1) 詩 107：23～30
   (2) 使 27：13～14、25、34
   (3) ヤコ 1：6

試練を通した信仰の成長について学ぶ。

Ⅰ．イエスのことば（22 節）

1. 22 節

Luk 8:22　ある日のことであった。イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸へ渡

ろう」と言われたので、弟子たちは舟を出した。

(1) イエスは、「湖の向こう岸に渡ろう」と 2 度言われた。

①舟に乗る前に、言われた（マタ 8：18、マコ 4：35）。

②舟に乗ってから言われた（ルカ 8：22）。

(2) 向こう岸とは、ガリラヤ湖の東岸である。

①そこは、ゲラサ人の地である（ルカ 8：26）。

②イエスは、向こう岸に渡る理由は明らかにしていない。

(3) ここでのポイントは、イエスのことばの信頼性である。

①2 つのたとえは、神のことばを聞き、それを行うことの重要性を教えていた。

②イエスは、「向こう岸に渡ろう」ということばを少なくとも 2 回は口にした。

③弟子たちには、安全に向こう岸に着けるという保証が与えられた。

④弟子たちの責務は、そのことばを信じて行動することである。

Ⅱ．弟子たちの信仰の後退（23～24 節 a）

1．23 節

Luk 8:23　舟で渡っている間に、イエスは眠り始められた。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、彼らは水をかぶって危険になった。

(1) 突風が吹く前に、イエスは舟の中で眠り始めた。

①イエスの人間性を証明している。

②イエスの平安な状態と、荒れ狂う湖が対比される。

(2) ガリラヤ湖には、突風が吹く地理的条件がある。

①海抜下 200 メールにあるガリラヤ湖は、すり鉢状になっている。

②西側に渓谷があり、風が吹き抜けるための通路となっている。

③突風が吹けば、湖面の気圧は下がる。

④高波で、小舟は水をかぶって非常に危険な状態になる。

(3) 漁師たちでさえも、死の恐怖を覚えた。

①「風」ということばが、3 度繰り返される（23、24、25 節）。

②弟子たちの信仰が試された。

(4) この突風の背後に、悪魔の企みを見ることができる。

①湖のそばに悪霊が住み着いている。

②イエスは、ゲラサ人の地に行って、悪霊につかれた人を解放しようとしている。
③悪魔は、自然現象を用いて、イエスと弟子たちを殺そうとした。

2. 24 節 a

Luk 8:24a　そこで弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、私たちは死んでしまいます」と言った。

(1) ここでの弟子たちの心の状態は、岩地の土壌である。
①芽を出すが、試練のときには枯れてしまう。
②彼らは、イエスを起こした。
③信仰があれば、起こす必要はなかった。

(2)「先生、先生、私たちは死んでしまいます」と言った。
①漁師たちは、カペナウムからさほど離れていない場所で漁をした。
②これほど沖に出て、突風に遭うのは初めてである。
③「先生、先生」と 2 回繰り返すのは、状況の緊急性を示したものである。
④彼らの信仰は、一時的に枯れてしまった。

Ⅲ. イエスの権威（24b～25 節 a）

1. 24 節 b

Luk 8:24b　イエスは起き上がり、風と荒波を叱りつけられた。すると静まり、凪になった。

(1) イエスの権威が示された。
①風と荒波を叱りつけると、ただちに凪になった。
②通常は、突風が去っても、しばらくの間、海は荒れる。
③この奇跡は、イエスの神性を証明している。
④被造世界は、イエスのことばに従う。

2. 25 節 a

Luk 8:25a　イエスは彼らに対して、「あなたがたの信仰はどこにあるのですか」と言われた。

(1) イエスは、質問によって弟子たちを叱責された。
①マコ 4：40 では、より厳しいことばが発せられている。

Mar 4:40　イエスは彼らに言われた。「どうして怖がるのですか。まだ信仰がないのですか。」

②ルカは、優しいことばを使っている。

Ⅳ. 弟子たちの信仰の成長（25 節 b）

1. 25 節 b

Luk 8:25b　弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「お命じになると、風や水までが従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろうか。」

(1) 弟子たちの自問自答は、彼らのイエス理解が不十分であったことを示している。
①彼らは、イエスがメシアであることを信じた。
②当時のユダヤ人は、メシアは人であり、政治的解放者であると理解していた。
③弟子たちの認識も、それと同じである。

(2) 彼らは、イエスが神にしかできない奇跡を行うのを目撃した。
①「いったいこの方はどういう方なのだろうか」
②当然の結論は、「イエスは神が人となられたお方である」というものである。

結論

1. 詩 107：23～30

Psa 107:23　船に乗って海に出る者／大海で商いする者
Psa 107:24　彼らは見た。【主】のみわざを／深い海で　その奇しいみわざを。
Psa 107:25　主が命じて／激しい暴風を起こされると／風が波を高くした。
Psa 107:26　彼らは天に上り　深みに下り／そのたましいは　みじめにも溶け去った。
Psa 107:27　彼らは酔った人のようによろめき／知恵はことごとく呑み込まれた。
Psa 107:28　この苦しみのときに　彼らが【主】に向かって叫ぶと／主は彼らを苦悩から導き出された。
Psa 107:29　主が嵐を鎮められると／波は穏やかになった。
Psa 107:30　波が凪いだので彼らは喜んだ。／主は彼らをその望む港に導かれた。

(1) 船乗りたちは、暴風の中に神の御手を見た。
(2) 知恵が尽きた彼らは、神に向かって叫んだ。
(3) 神は、彼らを危険から救い出し、目的の港に導かれた。
(4) イエスの弟子たちは、詩篇 107 篇を思い出すべきであった。

2. 使 27：13～14、25、34

Act 27:13　さて、穏やかな南風が吹いて来たので、人々は思いどおりになったと考え、錨を上げて、クレタの海岸に沿って航行した。
Act 27:14　ところが、間もなくユーラクロンという暴風が陸から吹き降ろして来た。

Act 27:25　ですから、皆さん、元気を出しなさい。私は神を信じています。私に語られたことは、そのとおりになるのです。

Act 27:34　ですから、食事をするよう勧めます。これで、あなたがたは助かります。頭から髪の毛一本失われることはありません。」

(1) パウロは、ローマに行くという約束を主から得ていた。

Act 23:11　その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた。

(2) パウロは難船の危機に直面したが、主のことばを信じ続けた。

3. ヤコ 1：6

Jas 1:6　ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。

(1) 弟子たちの経験の普遍化は、いのちの危険を感じるような体験である。

(2) 私たちは、こちらの岸（地上）からあちらの岸（天上）に向かって航海している。

(3) 突風が襲ってくる。

①職場での体験

②家族の病気

③予期せぬ悲劇

④人間関係の破壊

⑤致命的な病

(4) イエスを信じる者は、必ず向こう岸に着ける。

ルカの福音書　40 回
悪霊を追い出すイエス
ルカ 8：26～39

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエスは、第 2 回ガリラヤ伝道を行われた。
      ②イエスは、たとえを用いて教えられた（ルカ独特）。
      ③ルカは、土壌のたとえを重視した。
      ④ルカは、イエスの権威を証明する出来事を記した（4：31～6：16）。
      ⑥再び、イエスの権威を証明する出来事を紹介する（8：22～56）。

   (3) ルカ 8：22～56 の内容（イエスの権威の証明）
      ①嵐を静めるイエス（22～25 節）
      ②悪霊を追い出すイエス（26～39 節）
      ③病と死に打ち勝つイエス（40～56 節）

2. アウトライン
   (1) 悪霊につかれた人の状態（26～29 節）
   (2) 悪霊の追い出し（30～33 節）
   (3) ゲラサ周辺の人々の反応（34～37 節）
   (4) 悪霊から解放された人の反応（38～39 節）

3. 結論：弟子訓練の内容
   (1) 悪霊を支配するイエス
   (2) 人間のいのちの価値
   (3) 教会の奉仕の予表

悪霊の領域に対するイエスの権威について学ぶ。

Ⅰ．悪霊につかれた人の状態（26～29 節）

1. 26 節

Luk 8:26　こうして彼らは、舟で、ガリラヤの反対側にあるゲラサ人の地に着いた。

   (1) 地名について
      ①ルカとマルコには、「ゲラサ人の地」とある。
      ②マタイには、「ガダラ人の地」とある。

③ゲラサは町の名前、ガダラは地域の名前である。
④ガリラヤ湖東岸にクルシの遺跡がある（ケルサと呼ばれていた）。

(2) ガリラヤ湖の東岸は、異邦人の地である。
①イエスは、弟子訓練のために湖を渡って異邦人の地に来られた。
②嵐は悪霊の影響下で起ったものと思われる。
③デカポリス（10 の町）は、1 つの例外を除いてすべて東岸にあった。
④例外は、スキトポリス（ベテ・シャン）である。

2. 27 節

Luk 8:27　イエスが陸に上がられると、その町の者で、悪霊につかれている男がイエスを迎えた。彼は長い間、服を身に着けず、家に住まないで墓場に住んでいた。

(1) 悪霊につかれた人の数
①ルカとマルコでは、「ひとり」である。
②マタイでは、「ふたり」である。
③ルカとマルコは、最も深刻な状態の人に焦点を合わせている。

(2) 悪霊につかれた人の状態
①長い間、服を身に着けなかった。自尊心の喪失。
②墓場に住んでいた。共同体からの隔離。汚れた場所での生活。

3. 28 節

Luk 8:28　彼はイエスを見ると叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。「いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。お願いです。私を苦しめないでください。」

(1) 彼は、イエスを見ると叫び声を上げた。
①彼の内側にいる悪霊が反応した。
②御前にひれ伏した。単なるジェスチャーである。
③大声で言った。これが本心である。

(2)「いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか」
①弟子たちよりも悪霊の方が、イエスが誰かを認識している。
②イエスの名を呼ぶのは、イエスの上に支配権を確立するためである。

(3)「お願いです。私を苦しめないでください」

①悪霊は、自分の運命が終わりに近づいていることを予感した。

3．29 節

Luk 8:29　それは、イエスが汚れた霊に、この人から出て行くように命じられたからであった。汚れた霊はこの人を何回も捕らえていた。それで彼は鎖と足かせでつながれて監視されていたが、それらを断ち切っては、悪霊によって荒野に駆り立てられていた。

(1) 悪霊が叫んだ理由は、イエスがこの人から出て行くように命じたからである。

①この人は、悪霊の暴力的な支配下に置かれていた。

②この人は、鎖と足かせでつながれていたが、それらを何度も断ち切っていた。

③この人は、悪霊によって荒野に駆り立てられていた。

Ⅱ．悪霊の追い出し（30～33 節）

1．30 節

Luk 8:30　イエスが「おまえの名は何か」とお尋ねになると、彼は「レギオンです」と答えた。悪霊が大勢彼に入っていたからである。

(1) イエスは、伝統的なユダヤ的悪霊追い出し法を採用された。

①悪霊の名を聞き出し、その名を呼んで追い出す。

(2) 彼は、「レギオンです」と答えた。

①彼の内側にいる悪霊どもが答えた。

②レギオンとは、3,000～6,000 人の兵士を持つローマの軍団の名称である。

③このことばは、力と圧制の象徴でもある。

④つまり、この人の内に最低 3,000 の悪霊が住みついていたということである。

2．31 節

Luk 8:31　悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行けと自分たちにお命じにならないようにと懇願した。

(1) 主語が「彼」から「悪霊ども」に変っている。

①「底知れぬ所」とは、ギリシア語の「アブソス」である。

②そこは、悪霊どもが行く場所である。

③悪霊どもは、最後の運命を迎える前に、しばらくの猶予を求めたのである。

④神だけが悪霊どもを「アブソス」に送ることができる。

⑤悪霊どもは、イエスが神であることを認めている。

3．32～33 節

Luk 8:32　ちょうど、そのあたりの山に、たくさんの豚の群れが飼われていたので、悪霊どもは、その豚に入ることを許してくださいと懇願した。イエスはそれを許された。
Luk 8:33　悪霊どもはその人から出て、豚に入った。すると豚の群れは崖を下って湖へなだれ込み、おぼれて死んだ。

(1) そのあたりの山に、たくさんの豚の群れが飼われていた。
①この地は、異邦人の地である。
②デカポリスで食用の肉として販売するために、飼育していたのであろう。
③偶像礼拝のためのいけにえである可能性もある。

(2) 悪霊どもは、豚に入ることを求めた。
①人間がだめなら、豚でもよい、ということだろう。
②イエスはそれを許可された。

(3) 豚は、悪霊どもを内に宿すことに耐えられなかった。
①豚の群れは崖から湖になだれ込み、おぼれて死んだ。
②この描写は、周辺の地形をよく表現している。
③結局、悪霊どもは底知れぬ所に送られた。
④これは、安全に悪霊どもを追い出す方法である。

Ⅲ．ゲラサ周辺の人々の反応（34～37 節）

1．34～35 節

Luk 8:34　飼っていた人たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や里でこのことを伝えた。
Luk 8:35　人々は、起こったことを見ようと出て来た。そしてイエスのところに来て、イエスの足もとに、悪霊の去った男が服を着て、正気に返って座っているのを見た。それで恐ろしくなった。

(1) 豚飼いの牧童たちは、このことを所有者に知らせた。
①自分たちの過ちではなく、不可抗力であったと説明するためである。
②所有者たちは、自分の目で確かめるためにやって来た（野次馬もいた）。
③彼らは、湖に浮かぶ無数の豚の死骸を見た。
④さらに、正気に返った人を見た。
＊彼は、服を着ていた。
＊正気に返って座っていた。
⑤彼らは、「恐ろしくなった」。
＊ギリシア語で「フォベオウ」。畏怖の念。

3. 36～37 節

Luk 8:36　見ていた人たちは、悪霊につかれていた人がどのように救われたか、人々に知らせた。

Luk 8:37　ゲラサ周辺の人々はみな、イエスに、自分たちのところから出て行ってほしいと願った。非常な恐れに取りつかれていたからであった。それで、イエスが舟に乗って帰ろうとされると、

(1)「見ていた人たち」とは、牧童たちと弟子たちである。

①彼らは、目撃した内容を詳細に所有者たちに話して聞かせた。

②ルカは、豚よりも解放された人に焦点を合わせている。

③「救われた」ということばは、彼がイエスを信じたことを示している。

(2) 彼らはイエスに、自分たちのところから出て行ってほしいと願った。

①イエスがそばにいると、もっと大きな損失を被る可能性がある。

②ユダヤ人であるイエスが、異邦人である自分たちを裁くかもしれない。

(3) イエスは、舟に乗ってそこを去られた。

①イエスがその場所に戻ったという記録はない。

Ⅳ. 悪霊から解放された人の反応（38～39 節）

1. 38～39 節

Luk 8:38　悪霊が去ったその人は、お供をしたいとしきりに願った。しかし、イエスはこう言って彼を帰された。

Luk 8:39　「あなたの家に帰って、神があなたにしてくださったことをすべて、話して聞かせなさい。」それで彼は立ち去って、イエスが自分にしてくださったことをすべて、町中に言い広めた。

(1)「お供をしたい」とは、弟子になりたいという意味である。

①彼は初めて、自分の人生をかけてもいいと思えるものを発見した。

(2) イエスはそれを断った。

①この段階では、イエスは異邦人の弟子を受け入れてはいなかった。

②イエスは、自分の家に帰って証しをするように命じた。

③彼は、イエスの御業を町中に言い広めた。

④彼の奉仕が有効であったことは、4000 人のパンの奇跡の箇所で明らかになる。

⑤「神があなたにしてくださったこと」＝「イエスが自分にしてくださったこと」

＊イエスの神性が確認された。

結論：弟子訓練の内容

1. 悪霊を支配するイエス

(1) ユダヤ人読者に対する教訓

①パリサイ人たちは、イエスが悪霊の頭の力を利用していると主張した。

②悪霊につかれた男の解放は、悪霊に対するイエスの権威を証明した。

(2) 異邦人読者に対する教訓

①ギリシア・ローマ世界では、悪霊の活動は顕著に見られた。

②異邦人の地で行われた悪霊追い出しは、異邦人読者に強烈な印象を与えた。

2. 人間のいのちの価値

(1) ゲラサ人たちの視点は、癒された人ではなく、失った豚にある。

(2) イエスの視点は、一人の人は数千匹の豚よりも尊いという点にある。

(3) ルカは、その視点でこの奇跡物語を記録している。

(4) 悪霊は、「神のかたち」を破壊しようとしている。

(5) 神は、それを回復しようとしておられる。

3. 教会の奉仕の予表

(1) ユダヤ人たちは、イエスを拒否するようになる。

(2) 異邦人が救われる時代が来ようとしている。

(3) この奇跡物語は、使徒の働きの時代に教会が行う奉仕の予表である。

①使 26：17～18

Act 26:17　わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのところに遣わす。

Act 26:18　それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。』

②教会時代の伝道

＊サタンの支配から神に立ち返らせる。

＊信仰によって罪の赦しを得させる。

＊キリストとともに相続人とならせる（ロマ 8：17）。